鶴窓会だより

題字：元会長 佐藤 輝康氏 書

発　行
山形大学農学部鶴窓会
発行日 2015年12月10日
第22号

〒997-8555 鶴岡市若葉町1-23
山形大学農学部内
TEL・FAX 0235-28-2897
ホームページ kakusokai.net
E-mail kakusoukai@kdp.biglobe.ne.jp

特集「農場・演習林の今昔」元高冷地農場と砂丘地農場は？ …… 6
★会員の声 …… 15　★同期会報告 …… 25

鶴窓会活動を振り返って

山形大学農学部鶴窓会
会　長　佐藤　晨一
（昭和41年農学科卒）

会員の皆様には日頃より鶴窓会に格別のご支援とご高配を賜り衷心より感謝申し上げます。また、各会員の活動が職域や地域へ貢献され、さらにこれらを共有することを喜びとしております。

さて、本年度の当会に関わる活動を振り返ってみますと、本年度5月の代議員会前には2月13日に全学同窓会組織である校友会と山形大学との情報交換会（山形市）が開催され、各学部の動向で学生による研究活動や海外留学報告がありました。工学系が圧倒的に多い中で農学部からは生物資源専攻1年の紺野勇太さんの「水田への微生物燃料電池設置が土壌中メタン生成に与える影響」が選定され、発表が行なわれました。小山学長挨拶では入学志願者倍率が平均3・5倍と安定していることや大学運営交付金100億円の大半が人件費で、これが30％前後の増減情勢で直に人員削減になる厳しい状況であること、また校友会は平成28年には10周年を迎える報告等がありました。

続く2月23日には農学部地域連携推進会議（農学部会議室）への出席では、学部内の現状報告を入試、教育、研究、地域連携・国際貢献と各分野にわたり説明を受けました。沢山の資料を準備してくださり、学部を知るよい機会となりました。また、農学部に対する提言では、地域貢献を期待する立場から鶴岡南高からは農学部の研究成果に興味を持っている学生が多いことや荘内銀行からは農業の6次産業化と農業で起業する卒業生への言及、そして鶴岡高専からはICT農業化を実現するために農学部と一緒に取り組みたい提言がありました。

次に3月17日の学位記授与式に臨んでは、日本の食と安全を守るため、また厳しい国際競争の中、今ほど農業経営の自立性を図る必要に迫られている現状はないと思います。担い手の高齢化の中でUターンやIターンを果たす勇気ある会員がいることはご承知のとおりであります。一つ気付かされたのは私も含め恩師との結びつきの強さであります。このことが母校への愛着の源であることは言うまでもありません。地域連携推進協議会で農学部側から分野別実績のご説明で入試や教育分野に教職員がいかに心を砕いておられたかであります。とかく研究分野に目が奪われがちですが、人格形成の役割や優秀な人材を育成することの重要性を改めて認識したところです。

代議員会の後は、6月14日の宮城県支部総会開催（仙台市）、私は同日開催の関東支部総会（山大東京サテライト）に出席する機会を得ました。36名余りの支部会員参加のもと、結城章夫前学長からの「これからの人づくり・国づくり」と題した講演や会務報告ならびに議案の審議がありました。講演でも人材育成の重要性に触れ、平成18年の教育基本法の全面改訂、さらに平成20年の新学習要領策定があり、教育理念の練り直しの背景をお話しておりました。そして、道徳教育（徳育）の定着に向けては豊かな情操のうえにグローバル社会を生き抜く自立の精神を強調しておられました。

現在は、「鶴窓会だより」編集会議も回を重ねておりますが、特集記事「農場・演習林の今昔」への教職員の熱い思いや提案など紙面を充実させるために努力しております。このころになると、寄せられた原稿に対する意見交換も活発です。「鶴窓会」への励ましや注文のメールが届きます。日頃の活動に対して、本来「親睦」を旨とする活動理念に対する安住を許さない側面があると思います。「食の都庄内」への提言などは農学部の特色としているところであり、また、最近では自身の活躍した現場から農政問題をからめて「庄内米の将来展望」に関する持論を展開しながら鶴窓会の役割・機能について見直しを迫るご意見もあります。

最後にこの紙面は会員皆様からの会費によって賄われています。会費納入についてはご理解の上どうぞよろしくお願い申し上げます。

（記平成27年9月10日）

著書の紹介

『北の商都「小樽」の近代：ある都市の伝記』

東京都在住
山形大学名誉教授
内藤　辰美

この度、私は、『北の商都小樽の近代』（春風社、2015年）を刊行しました。本書は、農学部在籍中、葛西大和先生と共同で行った「小樽調査」が基になっています。内容は、幕末・明治初期に小さな漁村にすぎなかった小樽が、明治～大正期を通じて、北日本を代表する商業都市に発展していったすがたを社会階層に焦点を当てて解明したものです。発展成長する都市の歴史は社会階層の生起・没落の歴史です。階層移動の視点から、地方都市小樽の社会変動を考察してみました。

いま、多くの都市が消滅の危機にあるといわれています。戦後は大都市だけが繁栄し、地方都市は衰退と荒廃が目立ちます。危機感を抱いた政府は中央主導の地方再生に躍起となっています。しかし、地方を再生させるためには、地方が挑戦できる条件を備えなければなりません。戦前の小樽が参考になります。小樽市の再生はどうあるべきか。それはこの本の続編『戦後小樽の軌跡―地方都市の衰退と再生―』（春風社、2016・9）に委ねました。

◀『北の商都「小樽」の近代：ある都市の伝記』
春風社 3,900円+税

◀『中心と周縁：タイ、天草、シカゴ』
春風社 3,500円+税

▶『地域社会の新しい〈共同〉とリーダー』
恒星社厚生閣 3,500円+税

文芸書 歴史長編 戦記小説『小説 天下人秀吉』の紹介

神奈川県在住
加藤　美勝
（昭和34年農学科卒）

「光陰（月日）人を待たず、乱世は無常に過ぎていく戦国時代の末期―。」という切り口ではじまる。

▼織田信長の麾下（直属の家来）豊臣秀吉は、京の本能寺の変を、備中高松城水攻め中に知る。直ちに中国大返しをはじめ、京へ上り山崎の合戦で信長の仇討ちをする。賤ヶ岳の戦いでも勝利する。さらに、九州平定作戦で西国を統一する。

▼残る関東・奥羽の戦線である。小田原の北条氏、奥州の伊達氏らの惣無事令違反。

▼奥羽の群雄は、中新田の戦い、蘆名・伊達・郡山合戦、十五里原の戦い（庄内）、湊合戦（秋田）など戦乱が続いていた。

▼関東・奥羽征伐に秀吉の陣触れ。京を進発、関東の小田原北条の籠城戦で勝利し北条家を滅亡させる。

▼秀吉、会津黒川城に下向し奥羽仕置を行った。奥羽各地に一揆勃発したが、これら全て平定し天下統一する。

▼本書は、九州から東北にかけて、その大遠征の実相を克明に描いた。

▼豊臣秀吉が果たした天下統一の全貌がこの一冊ですべてわかる！

▼本書の山形県内所蔵館は、山形大学附属図書館、山形市立、米沢市立、鶴岡市立図書館。

▼ところで、最近のTV報道によると。大学図書館では、読まれない新品の書籍が多くなったという。スマホ・タブレットの普及で学生の読書力低下が憂慮される。

▼二〇二〇年から「歴史総合」として、高校の日本史と世界史は、必修科目になる（文科省）。日本史を知らない日本人が増えたためです。

◎書籍「表紙の画像」は、ネット書店「丸善&ジュンク堂」の「小説天下人秀吉」掲載のもの。

▲『小説 天下人秀吉』 本能寺の変報、西国・関東・奥羽の戦記,知道出版（東京）2015年発行　1800円+税

食品加工が一番わかる

食料生命環境学科
食品・応用生命科学コース
教　授　永井　毅

本著は、食品加工の原理や成分変化をわかりやすく説明するとともに、加工技術や新調味料の説明から、検査方法や検査機器、賞味期限の設定、消費期限設定基準について解説した本である。食品加工に直接は関係しないものの、重要な要素である包装や運搬、流通や販売といった食品を取り巻く設備や環境についても言及している。食品加工業に関わる方、食品関連に就職を考えている学生、食品関連の販売（営業職、事務職、販売職）や運搬など業務上、食品製造・加工の知識を短期間で効率よく学びたい方、食の安心・安全について考えている方におすすめの1冊である。

▲『食品加工が一番わかる』 技術評論社 1,880円+税

目　次

会長挨拶 …… 1
佐藤 晨一（昭和41年農学科卒）

農学部長就任のご挨拶 …… 3
夏賀 元康

着任のご挨拶 …… 3
浦川 修司　林　雅秀　網干 貴子

退職に寄せて …… 5
夏賀 元康

《特集》「農場・演習林の今昔」 …… 6
綱島 不二雄　本間 英治　大滝 諒子
泉　征三郎　保坂 良悦　新井 大輔
瀧　誠志郎

学生研究支援事業について …… 13
齋藤　博行（昭和45年農学科卒）

平成27年度春の叙勲を拝受 …… 13
相馬 敏夫（昭和41農業工学科卒）

「第4回山形大学ビーチサッカー大会」の開催 …… 14
齋藤 博行（昭和45年農学科卒）

会員の声 …… 15
帯谷 行夫（昭和29年農学科卒）
三浦 秀光（昭和48年農学科卒）
遠藤 敬治（旧姓平）（昭和48年農芸化学科卒）
中山 芳明（昭和49年農学科卒）
百瀬 清昭（昭和50年農学科卒）
福森 秀臣（昭和51年林学科卒）
出井 裕之（昭和52年林学科卒）
佐々木 俊一（昭和54年農学科卒業）
山田 耕治（昭和55年林学科卒）
阿部 徳文（昭和56年農学科卒）
日塔 明広（昭和58年園芸学科卒）
齋藤 千里（旧姓塚本）（昭和58年園芸学科卒）
安蘇 政樹（昭和60年農業工学科卒）
北村 尚士（平成7年生物環境学科卒）
臼井 靖浩（平成11年生物環境学科卒）
渡邉　充（平成17年生物生産学科卒）

同期会 …… 25
菅原 義昭（昭和40年農業工学科卒）
藤田　努（昭和41年農学科卒）
大津 英雄（昭和42年林学科卒）
髙泉　修（昭和45年農学科卒）
小野寺 薫（昭和47年園芸学科卒）
阿部 重彰（昭和48年農学科卒）
北村 尚士（平成7年生物環境学科卒）

在学生の声 …… 29
髙橋 あかり　長南 雄太　春田 魁登

留学生の声 …… 30
Nguyen Thanh Tung

支部報告 …… 32
北海道支部　庄内支部　村山支部
置賜支部　宮城県支部　関東支部
関西支部　福島県支部結成にむけて

追悼 …… 36
大谷　博彌（昭和46年林学科卒）
吉田　直之（昭和52年林学科卒）
山谷　睦（昭和62年林学科卒）

訃報 …… 37

鶴窓会事務局からのお知らせ …… 38
平成26年度事業並びに活動報告
平成27年度代議員会報告 …… 39
平成27年度事業計画 …… 40
人事異動、幹事及び代議員名簿 …… 40
平成26年度決算・特別会計積立金決算 …… 41
平成27年度予算・特別会計積立金予算 …… 41
平成26年度就職状況 …… 42
編集後記、編集委員 …… 43
著書の紹介 …… 44
内藤　辰美
加藤　美勝（昭和34年農学科卒）
永井　毅

あべ農園
刈屋梨幸水（8/25～9/10）
2L 5kg箱 2800円 送料800円
庄内米「特別栽培つや姫」（10/5～）
5kg　2500円 送料800円
山形県酒田市城輪字大場12
阿部重彰 TEL・FAX 0234-28-3000
（携帯）090-5234-6775

農学部創立70周年記念式典は平成29年10月14日（土）に開催されます。

会費の納入にご協力下さい。一律2,000円となりました。

農学部長就任のご挨拶

食料生命環境学科
安全農産物生産学コース
教　授　**夏賀　元康**

4月1日に西澤前学部長の後を承け農学部長に就任しました。2001年2月16日に50歳で山形大学農学部に助教授として赴任してから15年経ちますが、2016年3月31日で定年退職を迎える最後の年に1年間だけ学部長を仰せつかりました。

この15年は2003年の大学の法人化、2009年の農学部の学科改組と、大学全体も学部も大きく揺れた期間でしたが、最後のこの1年は、大学全体の組織改編に伴う農学研究科の定員削減、小白川3学部とのコース再編などで再び大きく揺れています。

農学部は2009年に3学科6講座制から1学科6コース制に改組しました。改組前は3学科で入試を行い、学生は入学当初から学科に分けられていましたが、改組後は1学科で入試を行い、1年次の成績と希望により2年次の鶴岡移行時にコースに振り分けられます。

学科改組前後3年間の前期入試の志願倍率は、改組前が平均2・5（最高3・1倍、最低1・6）、改組後が平均2・8（最高3・5倍、最低2・2）でしたので、学科改組は一定の効果があったと考えられます。しかし、最近3年では平均2・5倍（最高3・1、最低1・8）と少し落ちてきていますので、志願倍率3・0の維持を目標にしていろいろな対策を練っています。

学年進行に伴い、2013年には大学院改組も行いました。2008年のリーマンショック後の数年は就職難のために定員充足率は100％を超していましたが、最近数年は就職状況が改善されたため、充足率は平均75％程度になっています。そのため、2016年度入試から定員を48から42に減らすと同時に、充足率を改善するためワーキンググループでいろいろな方策を考えて実行に移しつつありますが、充足率改善はなかなか難しそうです。

これらの改組が学生にとって有意義なものであったかどうかを判断するため、4月に学生アンケートを実施しました。その結果は概ね好意的でしたが、コース制であることを知らなかったと答えた2年生が15％いたのには驚きました。入試の難易度、生活のしやすさなどが優先されて、入学後の教育まで考えが回らない、ということなのでしょうか。

農学部では地域教育文化学部の食品系コースとの再編の協議が進んでいます。それと同時に学科全体のコース再編も始めました。どのような結論になるか分かりませんが、任期の3月末まで、息つく間もない日々が続きそうです。

着任のご挨拶

やまがたフィールド科学センター
エコ農業部門
教　授　**浦川　修司**

平成27年4月より、やまがたフィールド科学センターエコ農業部門で畜産を担当させていただくことになりました。

大学卒業後は三重県庁に入庁し、三重県畜産試験場、農業改良普及センターや行政機関において、水田における飼料生産に関する研究や普及、行政等の仕事に携わってきました。特に試験研究機関に在職中には、稲の子実とわら部を合わせてサイレージ化する稲ホールクロップサイレージについての研究を行い、京都大学において博士号を取得しました。その中で、稲ホールクロップサイレージ用専用収穫調製機として、コンバイン型収穫機や自走式ベールラッパの開発に取組み、メーカ等と連携して実用化し、現在、全国各地域で利用されています。

平成20年には、農業・食品産業技術総合研究機構畜産草地研究所に転職し、稲ホールクロップサイレージに加え、近年、特に注目を集めている稲の子実を家畜飼料として利用する飼料用米の研究やプロジェクト研究のチームリーダとして、全国の公設研究機関等との調整業務に携わってきました。その他、稲ホールクロップサイレージや飼料用米の普及と定着化に向け、講演会や実演会のために、ほぼ全県を回らせていただき、多くの関係機関や生産者の皆さまと知り合うことができ、現在の私の大きな宝となっております。農学部のある鶴岡も、講演会等でお世話になったことがあり、食べ物やお酒も美味しく、私の好きな土地の一つです。また、畜産草地研究所に勤務するようになってから、単身赴任生活が始まり、今年度で単身生活も8年になりました。この間、二人の娘は大学を卒業し、結婚して、さらに孫も産まれ、気が付けば、孫は3人に増えていました。

最後に、近年における米価の下落や輸入飼料価格の高騰に対して、水田の機能を維持しながら、飼料増産を図ることのできる稲の飼料化技術は、耕種農家